2019年度事業報告

2019年4月1日から2020年3月31日まで

（１）特定非営利活動に係る事業　①地域開発及び地域自立支援に係る事業

①－１　地域資源の循環による農村コミュニティ生計向上プロジェクト
～農村青年層のための「ファーマーズ・スクール」

期　間　2019年4月1日～2020年3月31日（2017年2月より開始、2020年度も継続）
場　所　セネガル共和国ティエス州ンブール県ンゲニエーヌ行政区
協働者　アンテルモンド(Intermondes)　*セネガルのNGO/NPO
協力者　JICA「草の根技術協力事業パートナー型」（2017年2月3日～2020年1月31日）
事業費　13,278千円

事業の背景（事業を始めた経緯/どんな課題があったか）

セネガルは熱帯乾燥気候であり、特にンゲニエーヌ行政村では年間降水量が比較的少なく、また近年の化学肥料の使用や栽培方法に起因する土壌の劣化や地下水の塩化の問題もありました。しかし、降水量が比較的多いセネガルの北部や南部と比べて、政府や海外の援助も限られていたため、大規模な灌漑設備を導入することも、地域の農家には難しい状況でした。

このような状況で、農業に必要な水や土壌の現状を把握して保全したり、地域資源を使ったりしながら、栽培に係る支出や生産高の管理といった農業経営的な視点から農業をマネジメントできる人材も限られていました。

こうして、安定しない農業経営と天候に左右される不安定さから、特に若年層が農村を離れ、都市部や海外へ職を求めて人口が流出してしまうという現状がありました。

しかしながら、2012年からムラのミライが調査でセネガルへ入り、インタビューを重ねていくと、若者たちは「できることなら農村に残りたい」と考えていることが見えてきました。また、調査の際に出会ったセネガルの老舗NGO、アンテルモンドの創始者ママドゥ・ンジャイ氏も、農村の過疎化が進み生活の基盤がもろくなっていることに危機感を覚えており、結果、ムラのミライと共に農業開発プロジェクトを行うことになったのです。

プロジェクトの実践に際しては、過去のムラのミライの事業経験にのっとり、持続的な自然資源の活用を軸とした住民主体のプロジェクトとすることを確認した。農業研修の参加は、もともとNGOアンテルモンドが保健分野の事業で事業地となっていた村の若者たちの中から、研修に興味がある若者に開かれた形で募集された。

2019年度（まで）の活動内容（何をしたか）

〇2019年度までの活動内容

１．研修

地域にある資源を多角的に利用した循環型農法のスキルと、持続的な農業経営スキルを地域の青年たちが身につけることを目的として、これまでにモデル農家養成研修を6回行いました。

1）水の保全と循環に関連する土壌の性質
2）灌水のタイミングと適切な水量、基本的な灌漑計画
3）村にある資源を利用した土壌の保全と水の保全のための方策
4）連作障害を避ける栽培計画
5）作業ごとのコスト計算の仕方

研修では、昔の村の様子を思い出してもらうことで、現在の村で起きていることとの比較をし、数十年の間に何が起きたのが、その原因は何かということを紐解きながら考えていきました。研修生は座学だけではなく、村を歩いて現状を確認したり、アクションプランを作ったりすることで、問題を自分のこととして引き付けて考えることができました。

これらの研修に基づいて、アンテルモンドとムラのミライで毎月モニタリングを行い、進捗状況を確かめてきました。

２．ファーマーズ・スクールの整備

研修生たちが研修で習ったことを試したり普及したりする場として、自然資源を用いた循環型の農法を試しながら整備してきました。例えば、有機農業の専門家を登用することで、家畜の糞から堆肥を作り、その堆肥を使って作物を育て、それを飼料として家畜にあげるというサイクルができました。また、土壌を裸の状態ではなく、わらや植物で覆うことで土の保水性を上げる試みも常に行っています。

ファーマーズ・スクールは、有機農業専門家による研修などの場として活用されてきました。

〇2019年度の活動

2019年度は事業の最終年度であるため、これまで「モデル農家養成研修」で扱ってきた実践のための内容を、今度は人に伝えるための研修へとシフトしました。

特に、2019年の7月、8月には和田が専門家として2か月間セネガルに滞在し、その間にファーマーズ・スクールの従業員を中心に、研修の補足を兼ねた指導員研修を複数回おこないました。従業員たちはその研修の中で、ファーマーズ・スクールの野菜畑の地面を植物の根元まで掘り返し、自分たちの水やりの水量や頻度が適切だったか、土の湿り具合を実際に見て確認することもできました。

また、水やりの水量について農家に説明する際のポイントも確認しました。

他の村からの研修生（農家）に対しては、指導員の卵を中心にモニタリングを継続しました。2017年度、2018年度と村々では降水量が少なく、農業を中止した農家もいたほどでしたが、その状況にあっても、研修で学んだことに創意工夫も加えながら実施している研修生もいて、彼らの畑を中心に、研修内容の理解度や実践の様子を定期的に確認しました。

2019年度（まで）の成果（何が起こった/変わったか）

事業地の4カ村で、研修内容を十分に理解し、自分たちで実施することに加え、他の農家たちにもその経験を伝えている研修生が誕生しています。彼らは、2020年1月にJICAセネガルで開かれた事業報告会や、ファーマーズ・スクールでの在セネガル日本大使を招いての発表会において、自分たちの言葉で学んだことを発表しました。

【研修生の声】
ジャン・トップさん（40代、ンディアンダ村）
「私は、水やりを一度もしていないトマトを収穫しました。化学肥料も全く使っていません。でも質が良いです。土地が湿っていたので、それを利用して育てたのです。これは、研修で習った、「水の管理」に関係しています。研修で習ったことをもとに自分で考えたのです。
水の管理をするために、自分の栽培面積を知る必要がありました。他の人はトラクターで土地を耕作しているけれど、栽培面積がいくらかを知りません。面積を知ることで栽培に係るコストをあらかじめ計算することが出来ることを学びました。自分は計算するようになりましたが、その大切なことを知らない人もいます。」

ムサ・ディウフさん（30代、ンディエマーヌ村）「研修で習ったので、農作物栽培の収支を計算してみました。そうしたら、玉ねぎとオクラ以外はすべて利益がほとんど出ていないことが分かったのです。それで今は栽培する作物を変えました。」

サンゴネさん（30代、ンディアンダ村）「研修ではたくさんのことを習いました。特に水の管理については、他の農民に話して伝えました。また、土壌浸食の対策として、畝の作り方を工夫したり、土地の傾斜を観察したり、水の流れを遅くするために堰堤を作ったりすることも習いました。今は一人で実践しているけれど、村全体で起こっていることなので、みんなでやらないといけないと思い、啓発のためのビデオを作りました。」

ウスマン・ディウフさん（30代、バガナ村）「研修で、今まで知らなかったことを知りました。昔は土地が豊かで植物も十分にありました。でも昔と今の状況は変わりました。植生も変わりましたし、井戸の水も減って、土壌も劣化しました。これは村人である私たち自身が原因だということが分かったのです。でもそれまでは知りませんでした。和田が来て研修をする中で意識を持ち始めました。このまま何もしなければ村がなくなって、みんな村を出て行ってしまう。地下水の減少、塩化、そして土壌浸食が起きていること、そしてその対策を学びました。昔は家畜の糞尿の堆肥を使っていて、化学肥料は使わなかった。それが、人口が増加して化学肥料を使うようになった。それがどうして塩化や土の劣化を引き起こすのか、よく分かったし、種市場や化学肥料市場のことも見えた。そこで、解決策はコンポスト（堆肥）だと学んだ。研修で習ったこのようなことを、他の18人の若者たちに伝えました。この地域に少しずつ伝わっていることでしょう。」

【アンテルモンド（協働者）の声】
「これまでたくさんの事業に関わってきたけれど、失敗ばかりだったと言えるかもしれません。資金は多く費やすけれど、人々の行動変容を起こすのは難しかったです。
ムラのミライのやり方はシンプルで、やり取りに基づいて、相手のことを聞くだけです。村人のやり方をもとに、どうやったら良いのかを村人自身で見つけることを大切にしています。そして、いつも、かならず村の中にノウハウや、地元ならではの強みがあることを基本に、村を直接訪ねるのです。そのアプローチは質問をするという単純なものですが、それによって村が本当に必要としているものに向き合えるのです。このようなやり方はムラのミライから私たちも学びました。」

【農業から教育へ】

近隣の小学校からの依頼を受けて、ファーマーズ・スクールの従業員が学校給食のための菜園で栽培指導をしました。菜園の担当をしている教師に、水やりの量・畑の測量の仕方・コンポストの作り方・天然（有機）農薬の作り方・藁マルチについて教えました。その結果、教師は教わったことを菜園で実施した他、生徒たちに授業で教えて生徒も実践するようになりました。今後この菜園での収穫物は、家が遠くてお昼に家に帰ることができない生徒に提供される給食に使われます。

【執筆者＝菊地綾乃　ムラのミライ海外事業コーディネーター】

①－2　西宮で広げる、地域で助け合う子育ての輪

期　間　2018年4月1日～2019年3月31日（2018年4月より開始　2020年度も継続）
場　所　兵庫県西宮市
協働者　a little （ア・リトル）　　*西宮市のNGO/NPO
協力者　ジョンソン・エンド・ジョンソン日本法人グループ「JJCC助成プログラム」
事業費　8,289千円

事業の背景（事業を始めた経緯/どんな課題があったか）

少子高齢化が進み、多くの家庭では母親だけが子育てを担うことが当たり前のようになりました。そのような母親の多くを出産後に待ち受けるのは、産後うつ、産後クライシス、乳幼児虐待などの厳しい現実です。こうした課題にどのように取り組めばよいのかわからなかった2016年、西宮市で、妊婦や産後の女性とその家族に、家事サポートや学びの場を提供してきたア・リトルとの出会いがありました。その後、親子のコミュニケーション講座をア・リトルとムラのミライで協働して開催するなど一緒に活動を続けました。そのような過程を経て、2018年4月、JJCC助成を得て、「地域で助け合う子育ての輪プロジェクト」をスタートしました。